

『毎日新聞抄録索引』について

高 原 誠 一

「一人の人間にとっては非常に小さな第一歩だが、人類にとっては巨大な飛躍だ」

1969年7月21日午前11時56分（日本時間）人類が初めて月面をその足で踏んだとき、アポロ11号のアームストロング船長が、感慨をこめて地球に伝えてきた第一声である。

毎日新聞創刊100年を迎えたことし2月21日に『毎日新聞抄録索引——昭和46年朝夕刊第1面』を調査部で作らあげたとき、いささかオーバーな表現をお許し願えるならば、アームストロング船長のような気持を、この仕事にたずさわってきたグループが抱いたといえよう。

毎日新聞は創刊以来、1ページの欠号もなく、全号の紙面を保有し、マイクロ

フィルムに収めている。明治5年以來の日本の歩み——100年の歴史の記録である。しかし、この貴重な記録を資料として活用するために、検索する方法という点になると、残念ながら十分とはいえない。“100年間の総索引”を持っていないからである。

大正中期からの記事については、項目別に分類され、記事資料として整理されているので、必要に応じて検索し利用することは可能であるが、それ以前のことになると、事前の年月がわかっているならばマイクロフィルムを利用できるが、事件の内容が、わかっているにもかかわらず、発生年月が不明瞭なときは、索引つきの歴史年表によってその点を確かめてからでないと、マイクロフィルムを十分に使いこな

せない。

また、現在は新聞の縮刷版が出ており、社外の方々にも利用していただいているが、この場合も、事件発生の年月を知らないと、検索に手間どることになりかねない。前に引用したアームストロング船長の「第一声」を調べようとしても、アポロ11号の月面着陸が昭和44年7月ということを経験していないと、どの縮刷版を見ればよいか迷う向きもあろう。

創刊以来の「100年の総索引」があれば、こうした悩みは解消するであろう。しかし、これは大変な作業である。ニューヨーク・タイムス紙は1851年の創刊号から現在までの索引づくりに取り組み、その大半を完成したといわれるが、それに着手したのは1913年であり、半世紀以上の歳月を積重ねている。1968年からは索引誌のコンピューター編集に踏切っているが、各記事の「抄録」も年々くわしいものになる傾向がある。原記事への索引であることはもちろんだが、抄録誌だけを見ても、記事の内容が大体わかるような方向に向かいつつある。

やがて来るコンピューターによる情報化社会——その中で新聞社が情報バンク的な機能を持つとすれば、その保有する膨大な記録の索引づくりが基礎的な条件になる。われわれは、その方法を模索しながら、ともかくも昭和46年1月から12月までの東京本社発行の最終版の朝夕刊1面についての抄録つき索引を、一つのサンプルとして作りあげた。抄録を比較的くわしくすることによって、原記

事が掲載されている紙面を見なくても、おおよそのことがわかるように、つまり索引誌単独での利用価値を高める努力をしている点が特色である。

時間や人員などの制約もあって、朝夕刊の第1面だけを対象とする、やや変則的なものになったが、現在の新聞づくりは、重要ニュースを第1面に総合編集することが、新聞づくりの基本的な姿勢なので「毎日新聞の顔ともいえるべき「第1面のニュース」を全部対象にする」という方法をとってみた。その結果は、毎日新聞の縮刷版の大きさを150ページのコンパクトなものになった。第1面に顔を出さなかったため、収録できなかったニュースもあるが、一応おもな事件は登場していると思う。

製作に当たって一番苦勞したのは、見出し語の決定である。学術書や専門書なら用語が統一されているので、見出し語の決定にも、そう苦勞はないと思うが、さまざまな読者層の関心にこたえるため、あらゆる分野のニュースをカバーしている新聞には、各種の用語が入りまじる。また多人数の記者や編集者がいて、言葉の使い方も「少しでも新しい表現を……」と工夫している。さらに新聞記事は、それ自体が「独立した文献」であるケースは少なく、過去→現在→未来という歴史的な流れの中でとらえてゆかなければならない。多くの事件が連続性と分枝性を持っているからである。新聞記事がこういういろいろな特性を持っているために、見出し語の選定、索引の一貫処理は容易なことではない。われわれも試

行錯誤の連続であった。

さらに五十音順に配列するとなると「四次防」を「よじぼう」と読むのか「よんじぼう」と読むのかといったことの調査も必要になるし、固有名詞の略称——たとえば「総評」「日経連」「安保条約」——を、どの程度までそのまま使ってよいかという問題にぶつかる。

また一つの概念が、さらにいくつもの概念に分かれるような言葉、たとえば「公害」という言葉と、その下にくる「大気汚染」「騒音」といった具体性の強い言葉を、どのように関連づけるかという課題も出てくる。結局は主要外国名や沖縄、衆・参両院などの大きなテーマに限って、主見出し語と副見出し語を使い分け、そのほかの一般用語は「五十音順索引」として特性を生かすため、できるだけ具体的な言葉を、そのまま見出し語とし、相互の関連づけには、参照記号を活用する方法をとった。

こうした状態の中から、とにかく生まれ出た「抄録つき索引」は、いわば「テスト版」であり、満足すべきものというには、ほど遠い状態であるが、各方面から予想以上の好評と激励をいただいた。作業着手前と完成後の二度にわたるアンケート調査で、ご希望を寄せられた向きには実費（送料とも二千元）でお送りしたが、その結果「毎日新聞が大変な作業をやりとげたことに感心した。ぜひ継続して行ってほしい」といった感想が、たくさん寄せられた。同時に「朝夕刊第1

面だけでなく、全紙面ないしは主要記事まで含めたものにしてほしい」という要望や「人名に関するものは“別項、にした方がよい”」「見出し語そのものの目次を別につけてはどうか」など、ありがたいご意見もいただいている。

新聞社の調査部にある項目別の「切抜き資料」は現在の新聞づくりに大きな役割を果たしている。しかし、いわゆる「情報化社会」では情報量が爆発的に増大してゆく。それにつれて資料も幾何級数的にふえてゆき、保存するスペースが問題になってこよう。コンピューターないしはマイクロフィルムによる情報検索が、ますますその重要度を高めてくる。そうした方向への基礎になるものが「索引づくり」であろう。われわれが作った「抄録つき索引」は、そのヨチヨチ歩きの第一歩である。しかし、ヨチヨチ歩きにしても、とにかく「第一歩」を印したことに、それなりの意義はあったと思う。これを「巨大な飛躍」にしてゆくために、さらに各方面のご批判、ご教示をいただきたい——これが、この仕事に関係したのものたちの切なる願いである。

（たかはら・せいいち）

毎日新聞東京本社調査部員

〔注〕 なお、若干残部があるそうでですので、ご希望の方は「東京都千代田区一ツ橋1-1 毎日新聞東京本社調査部索引係（郵便番号100）電話（03）212-0321 内線4601」あてご連絡下さい。（編集委員会）